

風土



龍の玉
神蔵器

冬立てり花のごとくに三分粥

拈華微笑一茎高き石露の咲く

吐く息の金輪際に龍の玉

白息やほうーと漉瓶を当てらるる

M・R・I 冬蝶を追ひきれず

冬麗の奥の冬麗未完の句

深大寺に無患子の実の降る頃か

去るものは追はず冬月夜々育つ

眠りては極月の日の離れゆく

冬満月魁夷の白馬天を行く

爪ともすごとき遺言八つ手咲く

幻想

生死より死者ねんごろに日向ぼこ



竹間集

同人作品



冬の日 山田 暢子

冬がもめ不意にふらりと途中下車
冬帽子脱ぎてインターフォンを押す
ていねいに手を洗ひをり寒燈下
白すぎる人形の顔冬深し
パソコンのコード伸ばして冬座敷
「無言館」しんしんと眼の冷えてゆく
冬ざれてこれより神の山となる

瓢の笛 門伝 史会

近明史様より送られて
ひよんの笛生国室津の加茂神社
その中に一つ特大瓢の笛
くちびるに風の音して瓢の笛
師が吹いてあなたを呼べりひよんの笛
枇杷の花夕どき五時の暗さかな
五人目の孫を迎へる白障子
小春かな生れしばかりの赤子抱き

「櫂」以後(七十六) 野沢しの武

久に晴れてすがしき青や処暑の空
卒寿過ぎの姉に栗生る誕生月
莫産敷いて庭師まろび寝鶉の昼
榎の木に降る秋雨を見てをりぬ
館長と話す蠟螂手掴みに
鶏頭を強く雨打つ馬の墳
屋は診て老人の日の酒少し

丹後逍遙

— 田中佐知子 —

冬 苺 安 寿 が 口 に 含 み た り
安 寿 堂 守 り て 婆 の 日 向 ぼ こ
山 眠 る 筧 を 水 の す べ る 音
笹 鳴 や 縁 下 に 櫓 貯 め お か れ
人 買 ひ の 昔 や 炉 火 の 盛 り な り
山 椒 大 夫 屋 敷 の 跡 や 蜜 柑 売 る
蜜 柑 挽 ぐ 声 ふ と こ ろ に 由 良 ケ 岳
小 春 日 や 水 平 線 に 島 ふ た つ
冬 あ た た か 豊 敷 な る 礼 拜 堂
信 徒 ら に ス ト ー プ の 炎 の 揺 ら ぎ を り

宮津カトリック教会 四句

オルガンの椅子に膝掛畳まれて
シスターの添木してゐる冬の菊
綿虫を見失ひたる蕪村の碑
宮津見性寺 二句
碧梧桐の太き筆跡冬の鵲
海鳴りや畝高くして葱畑
音たてて潮遡る冬椿
冬浪に引き戻されつ舫ひ舟
櫂散る常世の国を石組に
白鳥の飛来や沖に虹立ちて
顔上げしとき白鳥の近づきぬ

伊根宇良神社

山河集

同人作品



神蔵器選

木の実降る父のことばのやうに降る

十井 三乙

湯の宿の上り框に木の実独衆

よく回る木の実独衆なり貫ひたる

黄落す沼を囲みて檜櫓

雪来るといふ予報なりかく晴れて

橋添やよひ

膳所に来て時雨したしき桃青忌

白障子はづしふた間の無名庵

十指組む合掌村の寒さかな

柚子買ひの畑に来てゐる日向かな

冬紅葉只今小学休校中

近藤幸三郎

開山忌近づく寺の柚子は黄に

きのふ椎今日どんぐりを拾ひけり

漁火かはた狐火か海荒るる

神南備の加茂の立砂北時雨

流鏝馬の馬場あらためや八つ手咲く

ノツクする音のかすかや冬はじめ

朝市の葱高々とエレベーター

小春日の墓にてのひらあててをり

磐座やわれひと粒の冬日となり

相寄りて水尾をひとつに月の鴨

浅田 光代

青山の時雨を灯す骨董街

花終我に過ぎたる友のゐて

男坂下りて師走の電気街

外苑や回り道して落葉踏む

隣席は明大鼯肩ラグビー戦

山本 浪子

◇特別作品◇

松明あかし

森高 武

初霜の阿武隈川の紅き橋
白河の閑訪ふ冬の雨と雷
狛犬を支へてをりし竜の玉
霜柱芭蕉と曾良の句碑一つ
笹鳴や閑跡に人入り来ぬ
傘放り銀杏枯木を見上げぬし
空堀の落葉の深さ踏みてをり
虫喰ひを一枚拾ふ冬紅葉

冬ざれや人の気配に温もりぬ
赤松の囲む南湖の時雨かな
大鷺の一步一步や冬の湖
Vの字に白鳥来る三十羽
白鳥の休みぬ挽き立ての珈排
かげ沼に銃声一つ返り花
松明あかし夜道をうねる小松明
松明あかし影も太鼓のばちを打つ
松明あかし三十余本の火の柱
傾きて松明あかしの勢ひぬ
松明あかし見終へし眼冷やしをり
「軒の栗通り」を帰る冬の月

風土集



神蔵器選

長次郎重榮

「俊寛」の見込みに秋のうれひかな
吹くたびに思ふ人あり瓢の笛
花野より一步荒野に入りしかな
襖絵の鶴の羽撃く獵期かな
横笛の思ひのほどや冬紅葉

東京

林いづみ

菩提寺

摩尼車一回一誦石路の咲く
しぐれ来て一畳台目の窓あかり
待合に円座のふたつ時雨来る
それぞれの本に位置あり秋灯し
ふたつ三つ窯場をともし烏瓜
弥陀に逢ふ冷たき手足忘じみて

三鷹

布施まこと

京都

橋添やよひ

念仏宗 永観 律師 冬芽立つ

施療の悲田梅

ようかん

橋添やよひ

法灯のみかへり如来冬紅葉
見返り弥陀時雨明かりとなりにけり
桂郎忌味見の盃の新走り
婚の荷に一張の弓柿日和
走り根に躓き出合ふ龍の玉
楼門の草鞋の丈を散る紅葉
真つ直ぐに落ちぬ言の葉村落葉
枯野 中漢と漢すれ違ふ
退屈なてのひら二つ茶が咲けり
括られて三の西待つ屋台の荷
冬の日のたひらに廻る暈の目
切干や母子右利き左利き
切干と日向分けあひをりしかな
秋晴れや緋模様は木妻積む

東京

柴田久子

盛岡

石崎 浄

秋田

工藤ミネ子